

暦（こよみ）と、松笠の暮らし（その 8 保関谷の社日さん②）

今回は、保関谷の「社日さん」の塔に刻まれている、五柱の神様の紹介です。（写真 1）

「天照太神」（あまてらすおおみかみ）：イザナギから高天原（たかまがはら）の統治を委託された神で、太陽の神です。太陽がなければ生き物は生存できません。

「大己貴神」（おおなむちのかみ）：オオクニヌシ（大国主）の異称とされます。大国主といえば、出雲大社の御祭神で、縁結びの神。大黒様でもあり、ケガをした白兔を助けた医療の神でもありますが、国譲り神話もあるように、土地の神、農耕の神の一面もあります。

「小彦名神」（すくなひこなのかみ）：「大己貴神」とペアで登場し、二神が協力して農耕や医療を掌（つかさど）ります。この二神で、稲種を広めてまわったという神話もあります。

「倉稲魂神」（うが（か）のみたまのかみ）：食物の神で、ことに稲の霊とされます。

「埴安姫神」（はにやすひめのかみ）：『古事記』では、イザナミの大便から生まれたという神で、そのことから、土壌を掌る神、田畑の土壌を守る神とされています。

このように、五柱の神様は、それぞれ農業に深い関わりがあります。この塔を通して、五穀豊穡を祈り、収穫に感謝したわけです。

この五角柱に神様の名前を刻む形式の石塔は、木次町湯村にある温泉神社でも、見ることができます（写真 2）。全国的には、北海道、埼玉、兵庫、岡山、広島、香川、徳島など、広範囲に分布しているようです。

『掛合村誌』（大正 15 年発行）には、「『社日仕事であともどり』ということわざがあるように、この日の作業は無益だとして、誰もが休業する。ことに、土を耕すことは悪だとされている」、という趣旨のことが書かれています。

また、『松笠村事跡』（明治 43 年松笠村役場で編纂）には、「午（うま）の日戌（いぬ）の日に田植をなすを嫌う。午の日に田植をなせば其稲より収穫せし米は葬式米となり、戌の日になせば亡と称し白穂多くして何れも田植を休業す。」とあります。

こよみを使って、貴重な休日を生み出していたのかもしれないですね。（次号に続く。）



写真 1



写真 2 木次町の温泉神社